

# 茅野市視察報告

令和 3 年 3 月 14 日(日)~15 日(月)

- 視察先 (1) 茅野市役所  
(2) ハケ岳ワーキングラボ  
(3) 古民家

視察者 多摩都市構想研究会；飯田理事、菊地事務局長  
古川会長、桜井顧問は、14 日の武蔵小金井駅での信号交渉事故のため、訪問を中止した。

- 訪問先 (1) 茅野市 今井敦市長ほか  
(2) ハケ岳ワーキングラボ 森ビル開発本部 部長 矢部俊男氏



## 1 茅野市役所での懇談

- (1) 紹介)森ビル開発本部 矢部氏「茅野市と多摩地域の連携について」

今回の立川市と茅野市の連携の試みは、かつてない産業改革、働き方改革と持続可能なまちづくりを目指し、双方力を補いながらともどもに発展していくといったものです。

立川市の IT 企業等に就職しながら茅野市で働くことによって、人材不足の立川市の IT 企業等にとっては人材が確保でき、立川市には法人税が入る。また、茅野市には人口の流出を防ぎ住民税が入る。茅野市では人口が確保できれば、おのずから町が活性化する。諏訪エリア出身の人に帰ってきてほしい。

例えば、茅野駅に近いところにテレワークの拠点ができれば、1 時間半程度の移動時間で立川市に着ける。茅野駅周辺での人口確保により、駅周辺の商店街も活性化できる。茅野市の住民にとっては、職住近接により長距離通勤から解放され、家庭での時間も確保できる。

こうした仕組みを可能にするためには、いくつかの条件がある。

- ① 駅周辺に働く場所を確保すること
- ② 茅野市に生活の利便性があり、魅力があること
- ③ 人材が確保できること
- ④ 適度な距離の連携先を確保できること

などであるが、大前提として、茅野市が若者をはじめ女性、お年寄りにも選ばれる街でなくてはならない。

こうした働き方改革とまちづくりの総合的効果が期待できるのが今回の取り組みである。今後どのようにこの条件を維持、発展させていくかが課題である。

最近、立川市と茅野市の連携が、マスコミで取り上げられてきたが、これは立川 IT 技術交流会会長の飯田氏の活動に負うところが大きい。

## 1 多摩都市構想研究会及び立川市 IT 技術交流会活動の紹介(飯田理事)

別添、茅野市との連携事例 研究会ホームページ掲載

要旨)

- ① 多摩都市構想研究会の紹介
- ② 立川 IT 技術交流会及び異業種交流会の紹介

立川は多摩地域の交通結節点（JR 中央線、青梅線、南武線、多摩都市モノレールが交差）であり、IT 企業が集中してきている。当交流会には 33 社が参加。優秀な人材を求めている。また、コロナ禍にあつてテレワークやワーケーション等の要請もあり、適地を探している。

- ③ オフショア、インショアの推進 これまでもアジア諸国との連携や他県との提携により人材の確保に努めてきている。コロナ禍にあつて国外との交流に制約がでてきた。
- ④ 多摩地域には、57 の大学があり、近接する諏訪地域からの卒業生もいる。また、この地域には諏訪理科大学があり人材を輩出している。この人たちが多摩地域で就職しながらも、アルプスの麓、良好な自然環境に恵まれたこの地域で暮らし働くイメージが湧く。
- ⑤ 話は変わるが、テレワークには、長時間通勤の解消や住環境の改善など利点が多い反面、いくつかの課題がある。勤務管理の問題だけでなく、心の健康管理に問題も浮上してきた。在宅で勤務すると、中にはやりすぎてしまい、心のバランスを崩す人も出てきている。こうした課題にも真摯に向き合いながらテレワークやワーケーションに取り組んでいきたい。
- ⑥ 一局集中の時代から地方分散の時代へ、この流れはコロナ収束後も変わらないものと考えます。茅野市と多摩地域は、一時間半という距離感からいっても丁度いい。就職は多摩地域の企業であっても、自然豊かな故郷の茅野市に家族と住暮らし、茅野

市の近接のテレワーク拠点で日々の作業をする。理想的な働き方改革と人材供給の仕組みが描ける。茅野駅隣接ビルに立川 IT 技術交流会の事務所も設置しました。ともに力を合わせ良い関係を築いていきましょう。

## 2 茅野市における新たなまちづくりへの取り組み (今井市長のお話を中心にまとめた)

### (1) 茅野市について

茅野市は八ヶ岳の西の麓にあり、  
四季おりおりの自然が楽しめる。  
4月～5月の連休前には桜が咲き、  
その後、花々が一斉に咲きはじめる。



蓼科、白樺湖、縄文文化などの観光資源にも恵まれている。特に、縄文文化では、市内に230を超える遺跡があるほか、日本で5つしかない国宝級の土偶が2つある。 (「縄文のビーナス」、「仮面の女神」) これらの観光資源を生かした産業の活性化を目指していきたい。

また、八ヶ岳の扇状地であり地盤が強く災害が少ない。また、茅野市にも湖東など湖に由来する地名が残っており、縄文文化が栄えたのも湖や硬い地盤が影響している。

### (2) 安心して暮らし、働き、子育てができる社会

企業、高齢者、来訪者、女性、若者に選ばれるまちが重要である。まちのセンス、文化度や産業。30代からの世代は、基本は田舎暮らしで、たまに都会に行くことを望んでいる。どうしたらそのスタイルを作れるかが課題である。

また、茅野市は災害にも強い地域だが、学校の耐震化等防災の観点からの各種の取り組みを進めている。

### (3) 便利なまち 「乗合タクシー のらざあ)」

イスラエルのソフトを活用して、「乗合オンデマンドタクシー (のらざあ)」を導入し実証運行をスタートした。(令和2年2月7日～令和3年5月31日)これは、日本発の取り組みである。



スマホ等に初期登録さえすれば、簡単に配車依頼ができる。迎えにくる場所の指定や到着時間の確認もできる。乗合タクシーなので、通常のタクシーより安価である。タクシー業界と話しあってなんとか、実証実験にこぎつけた。

主婦は子供やお年寄りの送り迎えに相当な時間を費やしている。この制約から女性を解放したい。高齢者も仕組みになれば、自宅近くから目的地までの移動が安価で楽になる。特に運転免許を返還した高齢者にとっては大切な移動手段になる。

バーチャルな停留所を市内 3,500 か所に作ったが、今後も増やしていく。乗合タクシーなので一人当たりの料金は格安にでき、しかも便利である。タクシー会社を説得するのは大変だったが、何とか実証実験をスタートできた。

(私たち視察者も、八ヶ岳ワーキングラボから市役所までと、市役所から麓にある蕎麦処まで乗合タクシーを利用した。)

① スマホで配車依頼、タクシー到着時間、タクシーの現在地の確認

② 安価な代金とスマホ決済（登録済のカード等）

#### (4) 人口減少に歯止め、広域連合を目指す

当市の人口は横ばいであるが、周辺町村は人口減少が続いている。周辺市町村との連携による地域の活性化、魅力づくりが課題である。

このための広域連合、市町村合併については、これまでも、商工会議所青年会議所の代表として市議会、県議会で議員活動を通じて挑戦してきたがことごとく失敗した。地元議会や建設業界まで反対に回る。困難な課題ではあるが、人口減少に歯止めをかけ、持続可能な地域づくりのためには不可欠な課題である、現在は市長としてスーパーダイシティに挑戦している。

#### (5) 縄文文化の発信（世界に向けて!）

当市には、日本に 5 体しかない国宝級の土偶のうち 2 体がある。「縄文のビーナス」、「仮面の女帝」である。

修学旅行の生徒 10,000 人を求め、沖縄に行った。縄文文化は 1 万年の平和である。沖縄には競うものはなかった。風光明媚な八ヶ岳に囲まれた市内 230 の縄文遺跡群により、まちごと博物館であり十日町とも協力して縄文文化を世界に発信していきたい。





左) 仮面の女帝、縄文のビーナス  
写真：茅野市尖石縄文考古館 HP



### (6) 多摩地域との連携

立地条件は、距離感が重要である。茅野市から1時間程度の距離感は、近くもなく遠くもなく最適である。

また、産業の充足度や都市として発展、文化度などの熟成度も重要な要素となる。立川市は発展し続けており、最適な候補市の一つであると思う。

多摩地域には、大学が集積しており、茅野市の子供たちの教育支援にも期待が持てる。今後、相互の理解、交流を深めともに発展していく良好な連携関係を築きたい。

### 3 ワークラボ八ヶ岳

茅野駅に隣接する商業ビルの中に、ワークラボ八ヶ岳がある。



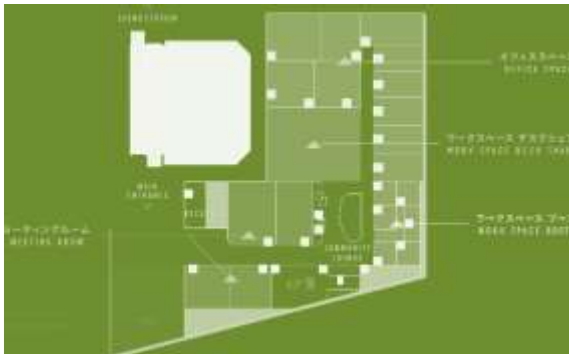
立川 IT 技術交流会オフィス前



デスクシェア



ワークブース



会議室、ロッカー(左)  
のほか  
個別ポスト  
給湯コーナー等

立川 IT 技術交流会は、このラボのオフィススペースに事務所を借りている。  
駅に隣接するビル内にあり、多摩地域、都心との交流に便利な場所にある。